

# 平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

## 1. 学校概要

学校名 大阪府立能勢高等学校 (※正式名称を記載)

種 別  保育園・幼稚園  小学校  小中一貫<sup>※注1</sup>

中学校  中高一貫<sup>※注2</sup>  高等学校

教員養成大学  専修学校、各種学校

特別支援学校

その他 (例：小中高一貫 )

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒 563 - 0122

大阪府豊能郡能勢町上田尻580

E-mail nose-hs@sbox.pref.osaka.lg.jp

Website http://osaka-c.ed.jp/nose

幼児児童生徒数 男子 96名 女子 54名 合計 150名

幼児・児童・生徒の年齢 16歳～18歳

## 2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定(見込み)として記載ください。

## 3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項1-1、2-1に対応

本校は平成27年度より文部科学省からスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定され、様々な活動を行っている。それらのSGH活動を、従来取り組んできたユネスコスクールのESD活動と連携し、これまでESDとして築いてきた学習手法や理念を活かして教育課程を編成し、よりグローバルな視点から実施している。SGH指定以来、本校のESDはより強化されてきている。

本校のSGH課題研究は、モンゴルでの「貧困とストリートチルドレン」およびマレーシアでの「経済発展と自然破壊」をテーマに進めている。具体的取組としては、①授業・特別講座、②課題研究と国内・海外実態調査、③国際交流、のそれぞれの活動の中で行っている。

### ① 授業・特別講座に係わる教育

授業・講座は、「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」「スーパーグローバルスタディ(SGS)」の科目を中心に、また、各教科と連携して行っている。外部講師を招いて講演やワークショップを行い、アクティブラーニングを実践している。外部講師として、大学教師、元国連職員、JICAなど国際活動の現場

を招いて、参加型の授業を行っている。また、ユネスコ国際交流委員会を中心に教科横断型の授業も設定し、E S Dが学校全体の認識となるよう工夫している。

## ② 課題研究と国内・海外実態調査

本年度は、S G S 授業受講生徒3名が、国内実態調査で東北の宮城県気仙沼、岩手県陸前高田市、大槌町を訪問し震災後の地方再生のあり方を学び課題研究を行った。また、同じくユネスコスクールである宮城県立気仙沼高校を訪問し、情報交換を行ってきた。海外実態調査では、S G S 授業受講生徒8名がマレーシアを訪問し、エビ養殖とマングローブ林破壊やオイルパームプランテーションと熱帯雨林の伐採などの実態を調査・研究し、経済発展と環境保全の両立、持続可能な発展とはどうあるべきかを考察した。またマレーシアでは、プトラマレーシア大学・スウィンバーン大学で課題研究の発表を行い、先生方や学生から様々な意見や助言をいただき、意見交換の貴重な機会となった。

## ③ 国際交流

2年次3学期に実施される修学旅行では毎年マレーシアを訪れ、姉妹校アスタ高校との交流やマレーシアの歴史・自然の学習を行っている。

留学生については、本年度は、年間留学生1名（アルゼンチン）、短期留学生4名（モンゴル、マレーシア、トルコ、オーストラリア）を受入れた。留学生たちは、日々のクラスでの交流に加え、校内での異文化理解授業、また地域の小学校・中学校での出前授業などのプログラムで、より交流できる機会を持つことができた。また、オイスカマレーシア高校生20名を受け入れ、京都での日本文化紹介ツアーで留学生と本校生徒がグループで活動し、言葉や宗教の違いを超えた交流が実現した。在大阪モンゴル国総領事館主催の行事に参加しモンゴル文化に触れ、また、インドネシア伝統音楽「ガムラン」演奏活動を通してインドネシアの方との交流もあった。大学で行われた英語村に参加し、世界の様々な国の出身者と交流し、価値観の違いに触れ、E S Dで学んだ知識を実際の交流の場で確認することができた。



① 講座：企業による環境保全活動



② 震災後のカキ養殖について調査



② マレーシアのエビ養殖場調査



③ マレーシア高校生との交流

## (2) 活動の詳細

### ① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

#### ア. 活動分野 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 3. 防災	<input checked="" type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input checked="" type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input checked="" type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input checked="" type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input checked="" type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他( )		

#### イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入 )	

#### ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他 ( 放課後や休日に行う SGH の特別講座 )	

#### エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

外部講師 (大学教員、JICA、NGO、企業) による講座が中心で、各講座のテーマに沿った教材が用意された。映像教材と印刷物による教材が使用された。以下に今年度の講座の一覧を添付する。

#### スーパーグローバル基礎知識講座

##### ■ 1年基礎知識講座

第1回 「児童労働」 中島早苗氏 NGO Free The Children Japan (フリー・ザ・チルドレン・ジャパン)

創設者・代表理事・事務局長

第2, 3回 「ビジネスプラン作り」 大場正規氏 日本政策金融公庫 大阪創業支援センター 比留間大輔氏 日本政策金融公庫・大阪創業支援センター所長

第4回 「モンゴルと私」 今岡良子氏 大阪大学准教授

第5回 「世界で活躍するNGO “オイスカ”」 清水利春氏 オイスカ関西研修センター所長

第6回 「ビジネスプラン発表会」 比留間大輔氏

第7, 8回 「文化祭模擬店準備」「文化祭」 清水利春氏 今岡良子氏

- 第9回（日本史A）「三つの壁を考える」 河合大輔氏 箕面市国際交流協会職員  
 第10回 「世界のためのデザイン」 久木田純氏 関西学院大学学長直属 SGU 招聘客員教授  
 元ユニセフ事務局長  
 第11回 「都市再生のランドスケープ」 中橋文夫氏 公立鳥取環境大学教授  
 第12回 「浄瑠璃の基本知識と実践」 松田正弘氏 浄るりシアター館長  
 第13回（家庭基礎）「日本の伝統文化を知る」 安野だんまる氏 ヤッサン一座 プロ紙芝居師
- 2年基礎知識講座  
 第1回 「パームオイルとボルネオ環境保全活動」 小辻昌平氏 サラヤKK CSR推進部長  
 第2回 「マレーシアの熱帯雨林の生態系」 乾陽子氏 大阪教育大学准教授  
 第3回 「アメリカの人種問題と人権」 荻野克彦氏 箕面市国際交流協会理事  
 第4回 「信頼で世界を繋ぐ」 早瀬悟志氏 元JICA青年海外協力隊員
- 3年基礎知識講座  
 第1回 「Think Globally Act Locally」 武田緑氏 一般社団法人コアプラス 代表理事  
 第2回 「旅が教えてくれること」 三上順子氏 能勢農家民宿「みちくさ」オーナー  
 第3, 4回（現代社会）  
 「内閣府から東日本大震災後の陸前高田市副市長へ」 久保田崇氏 立命館大学教授  
 「久保田先生の講演を振り返り受講内容を深める」 本校社会科教諭

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項1-2, 1-3 に対応

3. 活動内容（1）活動の概要で述べたとおり、本校SGHプログラムの中で、ESDを実践している。平成27年度にSGHに指定されて、教育課程の改変を行い、新たな学校設定科目「スーパーグローバルスタディ（SGS）」を設け、課題探求を中心とする授業を行っている。授業の一環として、国内・海外での調査・研究を実施し、大学教員の指導者もと、課題研究のまとめを行っている。この授業での成果は、2学期11月、3学期2月に一般公開の場で発表し、ホームページ等でも日本語と英語で公開している。各教科の横断的な授業として「基礎知識特別集中講座」を設け、留学生を招いて世界史をテーマに英語で授業を行うなど、異なった教科の担当者が教科を越えたテーマで授業を実施している。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項1-4 に対応

学校組織としては、「ユネスコ国際交流委員会」を設置し、各学年・各教科から委員を選出し、常に校内での情報交換が円滑に進むよう定期的に委員会を開いている。海外からの学校や団体の受け入れの際や、文化祭でのユネスコスクール活動などは、関係者を加えて役割分担を行っている。ユネスコクラブの活動は、クラブ顧問が中心に指導を行い、大きな行事への参加や生徒派遣の場合は、生徒会と協力して実施している。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

SGH活動の一環として、継続的に全校生徒へのアンケートを実施している。アンケートでは、「国際意識」「環境問題」「英語」「将来の勉強・留学」に分け調査し、この3年間の変化の特徴として、国際問題への興味は増加しているが、解決への道筋については悲観的な回答が増加した。外部評価として、外部者7名による「運営指導委員会」を設け、年間2回の運営指導委員会で、委員の方々より評価をいただいている。課題としては、生徒の発信力の伸びが少ないことであった。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。（200字程度）

※チェック事項 2-2 に対応

発信方法としては、ホームページ・ニュースレター（Global Times）・研究報告書（年1回）・研究発表会（年2回）・大学／高校での研究発表・大阪ASPnetでの情報交換、などである。全学年とも、学年末に研究発表会を開き、全生徒がグループごとに、1年間で学んだことからトピックを選びプレゼンテーションを行う。環境問題・農業・児童労働・国際援助などのテーマから研究課題を選び発表を行う。優秀な発表は表彰する。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成（地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など）（200字程度）

※チェック事項 2-3 に対応

大阪大学、大阪府立大学での講義において、SGH課題研究発表の招待を受け、発表を行った。鳥取環境大学を訪問し、ゼミ生と共に講義を受けた。SGH課題研究内容関連の研究をされている大学教授による授業（大阪大学・大阪市立大学等）・能勢町教育委員の地域創生に関する講義とワークショップ・地域再生マネージャーの講義とワークショップ・ほか地域創生に関する地元住民のワークショップに参加。教育委員会主催の「地域創造サミット」に招待された。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成（200字程度）

※チェック事項 2-4 に対応

ACCU主催 韓国政府日本教職員招へいプログラム2017に本校教員1名が参加し、今年度夏に訪韓。韓国ユネスコ国内委員会や教育庁・韓国のユネスコスクールの生徒や教員との交流を行った。加えて、1月には大阪ASPnetとして韓国教員の受け入れに協力した。また、1年を通して大阪ASPnet全体で準備セミナーを開き、中国ユネスコスクール教員・生徒との交流にも参加した。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）  
※チェック事項 2-5 に対応

ユネスコスクール・SGHの活動を通して、生徒の英語への意欲・関心が上がった。また、海外で起こっている問題や現状について考える機会を多く持てたおかげで、生徒自らが視野を広げ、積極的に外部と関わる事ができるようになった。生徒発表時には保護者にも来ていただき、好評を頂いている。教員に関しても、ユネスコスクール出身者が赴任し、教員との連携を取りながら活動の幅を広げている。

(3) 平成30年度の活動計画（200～400字程度）

SGH指定の4年目に入り、これまでの成果を活かしながら課題点を改善し、①授業・特別講座、②課題研究と国内・海外実態調査、③国際交流の分野でそれぞれ活動を行っていく。

①授業・特別講座では、昨年度のカリキュラムを踏襲しながら、SDGs やGAPをより意識した内容に改定し、特別講座での講師の選択を考える。

②課題研究と国内・海外実態調査では、国内では岐阜県で木材資源による地域創生のテーマを研究し、海外ではモンゴルで「子どもたちの貧困」をテーマに、大阪大学の先生の指導のもと8月にはモンゴルを訪れ現地での調査・研究を行う予定である。

③国際交流では、修学旅行で例年通りマレーシアを訪れる。4月よりEメールでマレーシア姉妹校生徒と意見交換を行い、3学期1月には実際に訪問し交流を行う。留学生については、4月よりタイの年間留学生を受け入れ、6月にはマレーシアから2名の短期留学生を受け入れる。9月にはマレーシア姉妹校生徒が30名来校し交流、12月には、オイスカマレーシア高校生20名が来校し、交流を行う。